

## 松山 忠弘展



神居尻とピンネシリを望んだ油彩『晩秋』(8号)

山の四季、時間によって変化する表情を描き続けて30年。「山に魅せられて」をテーマに道内を中心に海外の山を描いた30点のほかに水彩も発表。共にスケールの大きな描き方。昨年4月、名古屋で開いた個展に次いで18回目。

光景」という『ボスポラ海峡の夕映』(6号)以外は、山を展望あるいはアップして描いた雄大な光景。  
知床、羊蹄山、駒ヶ岳、十勝岳、芦別岳…道内各地の山々はもろろん「これまでにくらべて来た」

「山には存在感がある。そして空気を描きたい」。積丹の海を中心にした広々とした構図の夕景、  
「トルコに行った時に船上から見た

というネバールの山などを面白いっぱいに筆々と、しかも神秘感を漂わせて描き上げている。春夏秋冬の移り変わりと同時に朝焼けや夕景が自然の変化をドラマチックに見せている。  
4月のネバールの標高8千メートルの山を展望した『4月のニルギリ』(20号)や『タウラギリ』(8号)は冠雪の山がブルーの空中に高くと浮く、というスケール。「ニルギリを描く所に到達するのに10日

松山 忠弘(まつやま・ただひろ)さん「スケッチは4千から5千枚はある」。スケッチブックは手放さない。「スケッチを基に朝、夕や四季の変化を自分の色で描く」。今年には知床、ニセコへ行き、ニセコの後志川でゴムボートで初めて川下りを体験、その時の作品も展示されている。札幌北

高時代から油絵を描き、その頃は海の絵だった。山岳画家板本直行氏(1982年、75歳で他界)を中心に『歩歩(ぼっぼ)の会』の15回展に参加したことから山の絵に。同会は今年45回展を開いた。海外取材も豊富。01年7月、60歳の記念展を開いた。日本美術家連盟会員。1941年札幌市生まれ。旭ヶ丘夢工房を主宰。札幌市中央区旭ヶ丘1丁目2の4。



間歩いた」という執念と思いが込められている。  
早朝と夕方の山の表情が多く、澄んだ色彩で描いている。花畑の向こうにそびえる『雪雲の羊蹄』(6号)、噴火の威力を象徴する真っ赤な『駒ヶ岳』(3号)…水彩画は透明水彩とペンで素早く描いており山の魅力を堪能させる。  
札幌・さいとう Gallery (中央区南一西3)で11日まで。

ギャラリー